

教員養成課程の現状及び課題の研究 —新しい教師像を目指して—

増田修治・中林俊明・須川公央・山田 裕・堀江まゆみ・牧野晶哲

1、研究の目的

現在、教育現場には、支援が必要な児童・生徒が必ず在籍している。そうした児童・生徒だけにとどまらず、指導に困難さを抱えた児童・生徒も増えている。そうした指導の困難さ、親からの多様な要望、教育現場の忙しさなどから、教員採用1年目から3年目までの退職が多くなっており、大きな問題となっている。そうした中で、大学の教員養成から教職までをつないだ一貫したカリキュラムや指導が求められている。

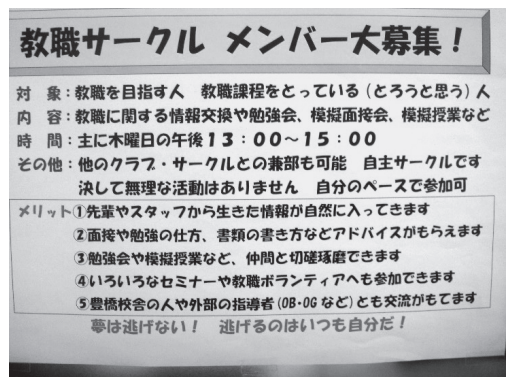
しかしながら、白梅学園大学では、教職を目指す学生のための学習相談や進路相談、教職に就いたあとのリカレント教育も不十分であると言わざるを得ない。また、文部科学省からも、「教職キャリアセンター」等の設置が推奨されており、教職への意義を十分伝えるとともに、教師生活を充実したものとしていくことも求められている。

こうした点から、白梅学園大学において、どのような教員養成課程が必要なのか、他大学がどのようなアプローチをしているのかを知り、求められる教師像を明確にすることが喫緊の課題となっている。そのためには、カリキュラムのあり方や「教職キャリアセンター」の取り組みなどを視察し、新しい教師像を明確にすると同時に、センターの当面の活動のあり方を早急に考えていく必要があると考えた。

そこで、白梅学園大学と同程度の教職希望学生を抱えている愛知大学と、教員採用試験合格率上位の愛知教育大学を視察することにした。

2、愛知大学の取り組み

愛知大学では、中学校教諭1種免許状として、社会・国語・英語・中国語が取得出来るようになっている。高等学校教諭1種免許状では、地理歴史・公民・国語・英語・商業・情報が取得出来るようになっている。小学校教諭1種免許状は、佛教大学通信教育課程を取ることで、取得可能となっている。



【自主サークルの呼びかけ】

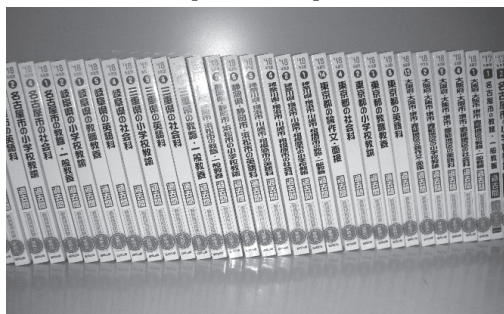
愛知大学では毎年100名前後の学生が教員免許状を取得しており、平成27年度には小学校11名、中学校7名、高等学校4名の合計22名が合格している。たくさんの学部・学科が混在し、取得免許が多様多様なため、教職受験講座の指導が非常に難しいとのことであった。

そのため、学生たち自身の自主的な学習グループを作ることが大きな課題であった。上の写真に見られるように、「教職サークル」の募集をかけ、常駐しているスタッフ（退職校長等）が相談に乗る体制が出来ていた。

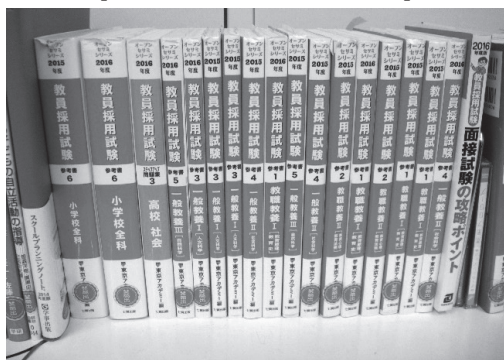
それと同時に、過去問題集が参考書がかなりそ

ろっており、誰でもセンターで学習することのできる体制が整っていた。この点は、すぐさま白梅学園大学に取り入れることとした。

【過去問題集】



【採用試験対策問題集と参考書】



また、驚いたのは、合格者が色紙を飾り、後輩を励ましていることであった。更に、合格した先輩が、後輩を教えるといった形も出来ており、教員採用に向けての体制がしっかり出来ていると感じられた。センター内は、教員採用試験の勉強が学生たちで出来るように、右上の写真のように整えられていた。

【先輩の励ましの色紙】



【学生たちの自主学習のスペース】



3、愛知教育大学の取り組み

愛知教育大学の正規採用者数は、2016年3月で国立44大学中第1位となっている。文部科学省が2017年1月31日に発表した2016年度の採用試験結果によると、正規採用と臨時的任用を合わせた数は459人で、全国1位（2位東京学芸大学444人、3位北海道教育大学416人）となっているそうである。

こうした合格率の高さは、どこにポイントがあるのであろうか。まずは、「教育交流館」を尋ねてみた。

【教育交流館】



【キャリア支援課】



建物が新しくなっており、建物内には、「キャリア支援課」というのがおかれていた。

に迫っていくようにしていくことも、大きな課題であろう。

(文責 増田 修治)

「キャリア支援課」の素晴らしいところは、様々な情報が学生に提示されていることである。また、写真にはないが、「キャリア支援課」の前の教室が、面接室になっており、「キャリア支援課」の机の上に「面接予約表」がおかれており、学生たちが自ら面接を行うだけでなく、予定表が埋まっていたことである。



4、白梅学園大学の課題

「教職教育・研究センター」が2017年4月に開設して以来、学生たちの利用や相談が増えたことは確実である。また、数人ではあるが、センターで採用試験の勉強をしている学生も見ることが出来るようになった。今後、どのように自主的な学習サークルを立ち上げていくかが、大きな課題であろう。

また、研究センターという性格上、採用試験だけに特化するわけではない。研究を深めていくという側面を充実させるための機器の充実、研究のための予算確保なども図っていききたい。そして、白梅を卒業して教員になった者たちのためのリカレント教育などにも力を入れていきたいと考えている。

研究課題が、「教員養成課程の現状及び課題の研究」であったが、結局のところ「教職センターのあり方」になってしまった。もっと養成の課題